

教育実習Ⅱ（幼）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 准教授 白石 崇人 准教授 田中 崇教

1 はじめに

幼稚園教諭一種免許状の取得を希望する学生を対象とした「教育実習Ⅱ」（3年前期開講）は、指定幼稚園において実習を行い、幼稚園教諭に必要な実践的知識・技能の基礎を身につけることを目標にした科目である。具体的には、次の9つの知識・態度の習得が目指される。

- ① 幼稚園教諭としての望ましい基本的態度 ② 教職員との協力的態度
- ③ 幼児の発達理解に関する知識・技能
- ④ 幼児に対するかかわり方に関する知識・技能
- ⑤ 幼児集団に対するかかわり方に関する知識・技能
- ⑥ 保育内容に適した環境に関する知識・技能 ⑦ 設定保育の計画に関する知識・技能
- ⑧ 幼児を保育するための基本的な指導力 ⑨ 問題解決に向けた研究的態度

2 実施のスケジュール

| 項目 | 時期 | 主な内容 |
|-----------------------|------|---|
| 事前学習 (学内・指定園) | 4～5月 | (11月・1月、履修予定者に概要・事前課題を説明) ・実習希望先の聴取結果などを踏まえて決定した実習先の通知 ・実習費等の事務手続きの説明 ・実習先への事前訪問、実習園事前オリエンテーション ・実習準備の個別支援（目標と課題、日誌、指導案など） ・実習前・中・後の心構え・諸注意 ・事後学修の日程・課題確認 |
| 実習期間 10日間 (指定園) | 6月 | ・合計20日間の実習期間を設定し、学生を2グループに分けて、それぞれ10日間実習を行う。 ・実習の内容は実習校の計画による。共通する主な内容は、①観察・参加実習、②日誌作成・指導、③保育指導案の計画と設定保育（1回以上、事前指導・事後反省会含む）、④日常業務である。 |
| 事後学習 (学内) | 7月 | ・各自実習を振り返り、教育実習記録をまとめる。 ・各自の実習内容に基づき、「実習中に会った事例」を作成し、報告会を実施する。 ・各園の評価票を基にして個別に評価開示を行う。 |

3 平成28年度の実施概要

平成28年度の「教育実習Ⅱ」は、履修生52名（すべて初等教育学科幼児教育コース生）を第1グループ27名と第2グループ25名に分けて実施した。第1グループの実習は平成28年5月30日～6月10日、第2グループの実習は6月13～24日に実施した。各園の実習生数は、2期合計して附属幼稚園では28名、協力園Aでは11名、協力園Bでは6名、協力園Cでは5名、協力園D（第2グループのみ）では2名であった。

実習前には事前学修会を3コマ分実施した。事前学修会は、まず平成27年11月（2年後期）に0.5コマ分、および平成28年1月に0.5コマ分を設定して、履修予定者に対して実習目標や評価規準、実習園概要、実習園決定の手続きなどを説明した。また、春期期間中の課題として、実習先の研究や、「目標と課題」の作成、日誌作成の練習、保育指導案編成の練習、ピアノ・絵本・手遊びの練習などを履修予定者に対して課した。3年前期には事前学修会を2コマ分実施した。4月には、実習園・グループの決定や実習クラス・グループ代表の選定指示、実習費の説明、実習園に関する先輩への質問、グループでの「目標と課題」の吟味などを行った。5月には、実習園に事前訪問して説明を受けるとともに、学内で実習直前オリエンテーションを開き、実習中の心構えや諸注意、実習後の手続き・事後学修などについて説明した。4～5月には、学生が作成した「目標と課題」および日誌（教育実習Ⅶの日誌を活用）、保育指導案（実習園・クラスを想定した案）について、担当教員3名（白石、田中、牧）で個別指導を行った。実習期間中には、各園の担当教員（幼児教育コース担当教員全員）が実習園を複数回訪問し、適宜、実習状況を聞き取ったり、実習生の様子を観察したり、直接指導を行ったりした。

事後学習は、前半・後半に分けて行った。前半は、履修生を6名の班に分け、学生がそれぞれ作成した「教育実習Ⅱで出会った事例」に沿って議論した。後半は、班が議論の結果を資料にまとめ、それぞれ10分間（発表5分・質疑応答5分）で全体に報告した。後半は、教育実習Ⅱ担当外の教員や次年度履修予定者になれるべく参加できるように日程調整を行った。なお、後半の報告会資料はすべて電子データとし、iPadでそのつど確認する形を取った。このように、一斉に行う事後学習は、子ども理解や保育の可能性について、学生が自分の事例を用いて具体的に考察を深め、その成果を班・全体に共有する形で行った。このほかに、学生たちは教育実習記録の様式を用いて全体的なふり返しを行い、実習園・担当教員の指導を受けた。

4 成果と課題

実習の成果について、学生の学修に基づいて記す。事後学習後半（全体報告会）では、全体的に、実習中に会った子どもと自分（実習生）との関わりについて具体的に研究することができていた。各班の題目は、以下の通りである。

第1班「子どもが自分から関わりを持てるようになるための援助」

（3歳児1名・4歳児2名との事例）

第2班「安心して活動できる援助」（3歳児1名との事例）

第3班「見通しを持った言葉かけ」（3歳児1名との事例）

第4班「子ども同士のトラブル」（5歳児2名との事例）

第5班「子どもが納得できるような言葉かけ」（5歳児1名・3歳児1名との事例）

第6班「一人ひとりに合った援助」（4歳児1名との事例）

第7班「気持ちを汲み取る言葉かけ」（3歳児1名との事例）

第8班「こだわりがある子どもに対する理解」（4歳児2名との事例）

第9班「子どもの気持ちに寄り添った援助」(4歳児1名との事例)

最後に、今年度の実習を通して明らかになった、運営面での課題を3つ記す。まず第1に、今年度ある実習園から伺った実習に関する悩みである。それは、例えば、実習クラスの出席人数をあとで担当教員に質問する、このようなことは何日か実習に行っていればいちいち聞かなくても自分で把握しておけばよいとすぐわかることである、本園は広島文教女子大学の附属幼稚園ではないのになぜこんなことまで指導しなければならないのか、といった悩みであった。昨年度から教育実習Ⅶでの現場経験時間が大幅に減り、学生たちは教育実習Ⅱで初めて経験することが増えた。そのため、附属幼稚園や大学で学びきれなかったことを教育実習Ⅱでフォローしていただかなければならないことが増えた。今年度は、このような状況にある学生を教育実習Ⅱに出した初年度であったため、実習園が戸惑ったのであろう。時間には限りがあり、現場で学ぶべき内容を事前指導でカバーすることには限界があるし、そもそも現場から離れたところで細かい実務的なことがらを指導しても効果は上がらない。しかし、学生の理解に応じたきめ細やかな指導を、学外幼稚園にお願いすることはなかなか難しい。これまでの教育実習Ⅱでは、附属幼稚園での実習は十分行ったものとして、なるべく学外幼稚園に出す方針で運営していた。状況が変わった今、この教育実習Ⅱの運営方針そのものを一から考え直す時期に来ているのではないか。例えば、附属幼稚園での実習を増やすか、2年次の保育ボランティアをもっと奨励して少しでも現場経験を増やすか。特に、本学学生の保育ボランティアの経験は、他大学の学生に比べて、少ない傾向にある。早急に対策を練って実行に移すべきであろう。

第2に、実習中の不測の事態に対する対応についてである。今年度の第2グループ実習中、大雨のため、避難勧告等がよく出た。今後もこのようなことは起こりうる。場当たりの対応にならないように、不測の事態に対する対応について教職センターで明文化し、学生に周知できるように実習記録などに記載する必要がある。その際、本学の実習担当教員が対応できない場合や、遠方のため現地の状況を把握できないため現実的な判断に適さない場合もあるため、なるべく現場の判断を尊重できるような基準を採用する必要がある。

第3に、実習中の欠席に対する処理である。実習園は近年ますます多忙化しており、実習受け入れに対する負担感は大きい。また、教育実習Ⅱの場合、避難勧告や交通機関の遅延などによってやむを得ず1日休園になった際、10数名もいる実習生の実習を補充することは極めて大きな負担になる。このことを考慮して、欠席に対する処理についてどのような形が適切か、他大学の事例なども踏まえて考える必要がある。